

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520164

研究課題名（和文） 後期上方読本の成立における実録の影響についての研究

研究課題名（英文） Study on the effect of *jitsuroku* upon the origination of the latter *Kamigata-yomihon*

研究代表者

田中 則雄（TANAKA Norio）

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：00252891

研究成果の概要（和文）：

後期読本の成立期に制作された、実録を典拠とする上方出来の作品群に見られる方法が、その後の読本制作の基礎となっている。実録には、各々の話を連結していく独自の方法があるが、読本においては、特に長編構成を統括するための仕組みが考慮され、人物の内面と連動させて必然性を示しながら話を繋いでいくという様式が考案され継承されたことを解明した。

研究成果の概要（英文）：

Some of the *kamigata-yomihon*, which were produced in the beginning of the *latter-yomihon*, depending on *jitsuroku*, have their own form. *Jitsuroku* has a method to interconnect stories. *Yomihon* has worked out a particular framework to generalize the hole of the novel. The authors of *yomihon* indicated inevitabilities of the stories, through inner discription, and interconnected stories. This method had an influence down the ages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世小説、読本、後期読本

1. 研究開始当初の背景

後期読本（19世紀前半を中心とする長編小説）の研究は、従来江戸出来の作品に集中しており、上方読本に関しては極めて少ない。

しかし後期読本は、寛政・享和期（1700年代末～1800年代初め）の上方出来の作が先行するのであり、江戸読本はこれを受けて、山東京伝・曲亭馬琴らが文化 5、6 年（1808、09）頃から独自の様式へと展開させたものである。

したがって後期読本の全体像を捉えるには、上方読本の成立状況を把握することが不可欠である。また成立期の上方読本の多くが実録を典拠としていることから、実録の影響の解明を探究課題の中心とする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 実録を典拠とする後期上方読本に備わる記述体の解明

実録を典拠とする読本の典型は、速水春暁齋の絵本読本である。話の筋を構成するにあたり、人物が特定の感情を抱くに至る必然性を説明するために、典拠の実録には本来無かった様々なエピソードを付加するという方法は、春暁齋の記述体と認められる。この点に関して、春暁齋と同時期の作者、後継の作者の作品に関して検討を行う。

(2) 実録に備わる記述体とその読本への影響についての研究

実録には本来独自の、話の筋の構成方法、描写方法などが備わる。このことについて作品に即して具体的に解明する。そのうえで、実録が読本に取り入れられるに際して、この記述体がどのように踏襲され、あるいは改変を受けるのかについて探究する。

(3) 読本における江戸・上方の問題についての考察

江戸読本は京伝・馬琴（特に馬琴）の作風を以て典型と見なされることが多いが、他の江戸作者の作風をどのように把握すべきか。これを実録受容という観点に即して考察する。

3. 研究の方法

(1) 諸本調査と資料収集

速水春暁齋以降の上方作者の作品、およびこれと対比するために、江戸作者の、実録に依拠する読本に関して、原資料とマイクロ資料によりながら書誌的事項の調査を行う。そのうえで善本と認められる資料を研究の底本に定め、撮影、複写等によって収集を行う。

また読本の典拠となった実録に関しても、その諸本調査と収集を同様に行う。

(2) 読本における実録摂取についての分析

収集した底本に基づきながら、読本、実録双方に関して、詳細な梗概を作成したうえで、それぞれの記述体の特質を解明する。

そのうえで、実録が読本に取り入れられ、読本独自の様式へと組み替えられていくことに関して、具体的に分析を行う。

(3) 読本史全体に関わる問題の考察

以上の検討を通じて得られたところに拠り、江戸・上方の問題など、読本史全体に関わる問題について考察を及ぼす。

4. 研究成果

(1) 実録と読本、演劇と読本の関係についての考察

〈実録→読本〉という関係を考察するにあたり、〈演劇→読本〉という関係との対比が

有効であるとの発見を得た。

後掲の〔雑誌論文〕⑥において、従来研究対象として取り上げられることのなかった実録『敵討雲陽実記』について論じた（依拠した本のうち一は新出写本）。享保年間松江藩で起こった妻敵討事件を素材とするが、構成面などに実録独自の様式が明確に現れている。このことは同一事件を描いた浮世草子と対比することによっても把握できる。

一方で同事件は、近松門左衛門の浄瑠璃『鏝の権三重帷子』（享保2年）によって舞台化された。後期上方読本『鏝権三累襷（やりのごんざかさねかたびら）』は、近松の浄瑠璃に拠りながらも、読本独自の様式を設けている。その典型は、悪人の滅亡という型を設けて、事件の終熄を象徴的に表示するという方法である。この点はむしろ、実録の様式から取り入れたものと考えられる。

また〔雑誌論文〕⑤では、浄瑠璃の摂取という点に即して、江戸読本、上方読本各々の方法の類似点、相違点を解明した。ここで得られた結論は、実録の摂取という点に即して見た場合にも適用することが可能である。

(2) 実録の記述体に関する研究

実録独自の記述体が、実録の読者層の広がりと同時に、地方の実録作者にまで及んでいることについて、出雲地方出来の実録類を例に解明した（〔雑誌論文〕②および④）。

松江藩で起こった敵討事件を元に作られた『三巴八雲の敵討』は、全体の構成方法、人物の人間性の造形とその描写などの点で、当時流布した実録類と共通の方法を用いている。そのことを、同一事件について記録する史料類との対比によって解明した。

また出雲母里藩の御家騒動を素材とする『雲州橘之巻』は、特に人物造形において、作者特有の捉え方に即して描写するという方法が見られ、このことで実録としての様式を保っている。

後掲の〔図書〕において、出雲で作られた実録『雲陽秘事記』の記事に関して、松江藩政期の史料類と対比することにより、史実とは合致しない虚構を、作者が積極的に導入していることを明らかにし、このことが実録独自の記述体と大きく関わっていることについて論じた。

近世において地方の旧家や貸本屋で読まれた実録類が発見されることもあり（このことについては②、④の論の中で言及している）、実録の読書と同時に、その作法についても、従来考えられていたよりも広く流布していたことが明らかになってきた。

(3) 読本における長編構成という問題についての考察

後期読本の最大の特質の一つは長編であ

るという点にある。〔雑誌論文〕③の中で、曲亭馬琴の『俠客伝』を取り上げ、人物の内面の把握のあり方が、作品全体に及ぶ長編構成の構想のあり方と連動していることについて論じた。

このことは後期読本における最も基礎的問題の一つであり、実録依拠の読本においても適用が可能である。この観点から考察を行うならば、読本が単に実録を踏襲するのではなく、それを読本独自の長編構成に組み替えていくという方法を用いていることを把握することができる。

(4) 読本の様式の基本とは何かという問題の探究

〔雑誌論文〕①において、浜田藩江戸屋敷で起こったとされる女敵討事件の実録（いわゆる鏡山物実録）と、それに依拠する読本、それぞれの様式について考察した。

まず当事件の実録の諸本を調査し、大きく2系統に分類できること、その中でも、伝本によって独自の観点による付加改変が見られることを明らかにした。いずれも、人物の内面と事件の発生推移との必然的なつながりを作り出していくことに意識が向けられている。

当事件を扱う読本に関しては、まず『女敵討記念文箱』（天明2年）がある。書型も中本型で中編小説というべきものであるが、読本としての様式は認められる。ここではまず善・悪の対立構図を明確に示したうえで、最終的に善が悪を克服することで収束するという構成を設けている。

川関惟充の『絵本加々見山列女功』（享和3年）は、後期読本であり、長編である。前記の速水春暁齋が上方で絵本ものの読本を制作していたのに呼応して、江戸で出来た作である。実録に大きく拠っているが、ここには長編構成への明確な意識があり、これが読本としての様式を形成している。全体を、単なる事件の接続として描くのではなく、特定の人物、その関与の仕方などを提示し、それが中間部分を経て、さらに結末に至ると、そこに一連の展開を生じていることが示され、このことによって全体が緊密に構成された長編小説として把握されるという方法である。享和期の作として時期も早く、素朴な形ながら長編構成を旨とする後期読本の様式への意識が認められる点、重要である。

速水春暁齋による『絵本雪鏡談』（文化2年）は、これ以前の諸作品において、当事件が、本来別事件である加賀藩の御家騒動と融合して扱われていることを批判し、峻別して単独で扱うべきことを表明したうえで、実録の読本化を図っている。本作において特に顕著であるのは、悪の側に位置する人物（岩藤）の内面を描くことを意図した点である。単に

悪人ゆえに悪事をなすとするのではなく、そこに至るまでの必然を、内面の動きの経緯を描くことによって示す。この部分は実録にも備わらず、読本化に際して作者が新たに設けたものであったと推定される。先に「2. 研究の目的」欄で述べた、春暁齋の記述体に関する見通しが正しいものであったことが、この考察を通じて明らかになった。

なお善の側に位置する尾上に関しても、岩藤の言動によって内面的に影響を受け、それが蓄積したところで事件が起こるに至ったという捉え方を示している。いずれも、人物の心情の必然、その連鎖によって話を構成するという方法が貫かれている。

(5) 文政期以降への展開

後期読本の成立期に速水春暁齋を中心に形成されていった作法が、その後どのように継承されていったのか、文化期を経て、特に文政期に至っての状況について探究を及ぼした。

『忠臣山賤伝』（文政9年）は、江戸作者・桃華園三千丸が、上方の楠里亭其楽の校正を受けて刊行した作品で、実録を典拠としている。ただしここでも、実録を大きく改変して読本の様式に組み替えている。ここには江戸・上方の作者の交流、作法の交流という問題が関与している。江戸・上方と単純に区別するのではなく、そこに交流・融合の跡を認めながら、春暁齋等によって生じた作法の端緒がどのように引き継がれたのかを探究していくべきであることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

① 田中則雄，浜田藩江戸屋敷女敵討の実録と読本，山陰研究，4号，pp.1-15，2011，査読有

http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz004/04_tanakaartocle.pdf

② 田中則雄，松江藩と実録，アジア遊学，135号，pp.142-151，2011，査読無

③ 田中則雄，水滸伝と白話小説家たち，アジア遊学，131号，pp.132-141，2010，査読無

④ 田中則雄，実録『三巴八雲の敵討』について，山陰研究，2号，pp.19-32，2009，査読有

http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz002/ver2_tanaka.pdf

⑤ 田中則雄，浄瑠璃の読本化に見る江戸風・上方風，江戸文学，40号，pp.92-105，2009，

査読無

⑥田中則雄, 松江藩士妻敵討事件の小説化について, 『日本のことばと文学—日本と中国の日本文化研究の接点—』, pp. 294-308, 2009, 査読無

【翻刻、目録】

①田中則雄, 山陰研究センター山本文庫目録稿(一), 山陰研究, 4号, pp. 99-108, 2011, 査読有

http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz004/10_danakadoc.pdf

②田中則雄, 翻刻『三巴八雲の敵討』, 山陰研究, 3号, pp. 55-67, 2010, 査読有

http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/kiyo/kiyobase/zzz003/ver04_tanaka.pdf

〔図書〕(計1件)

田中則雄, 雲陽秘事記と松江藩の人々, 松江市教育委員会刊, 2011, 全90ページ, 査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 則雄 (TANAKA NORIO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号: 00252891

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし